

I 研究主題と副題

えびの市の一貫教育の充実を目指して
～「読解力」の育成をめざす国語科における一貫した指導方法の研究～

II 主題設定の理由

○ OECD の PISA 調査では、わが国の子どもたちの読解力が低下している状況にあるなど、大きな課題が示された。PISA 調査は、読解の知識や技能を実生活の様々な面で直面する課題においてどの程度活用できるかを評価することを目的としており、これは新学習指導要領がねらいとしている「生きる力」「確かな学力」と同じ方向性にある。つまり、このような能力を学校の教育活動全体で身に付けていく必要があり、特に国語科においては、言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現するなどの能力を身に付けさせることが求められている。

○ えびの市は、昨年度から小中一貫教育を全小・中学校でスタートさせた。えびの市の小中一貫教育は、学力の向上と将来のえびの市を担う人材の育成をめざしており、「えびの学」「英会話科・英語表現科」など、えびの市独自の教育も実践している。

平成21年度に実施した全国学力・学習状況調査及びみやざき小中学校学力・意識調査において、国語科「読むこと」の平均正答率は、国や県の平均正答率を下回る傾向にあった。実態としては、「基礎的・基本的な内容の問題」「文章を読み、理由を書いたり適切なものを抜き出したりすること」などはよくできているが、「内容を簡潔にまとめたり、箇条書きなど指示された書き方でまとめること」「基礎的・基本的な内容を生かして課題を解決する力を問う問題」などができていなかった。これらのことから、えびの市の児童生徒は、テキストに書かれたことを「理解・評価」（解釈・熟考）することや、テキストに基づいて自分の意見を論じたり、テキストを「活用」したりすることなど、読解力に課題があった。これは PISA 調査の結果分析と改善の方向で示された読解力についての課題と共通するものである。

○ えびの市教育研究センターでは、2年間、小中一貫教育における算数科・数学科の学習指導法の研究として、9年間を見通した系統表を作成し、発達段階に応じた指導過程や指導方法の工夫改善に取り組んできた。

本年度は、これまでの研究やえびの市の児童生徒の実態を踏まえ、国語科における読解力の向上について、小中一貫した指導方法の研究を進めていくことにした。この研究でめざす読解力向上とは、PISA 型読解力を踏まえ、「読み取る力を身に付け、自ら学び、課題解決する児童生徒」の育成をめざし、領域を説明的な文章教材に絞って研究する。

理論研究班では、読解力向上のための学習の系統表を作成することで、小中9年間を見通した読解力向上が図られるようにする。作成した系統表は、えびの市の小・中学校に伝達し、えびの市全体で読解力向上に取り組むことができるようにする。また、読解力向上のための指導過程や指導方法の工夫、指導事項を指導するのに適切な言語活動の充実について研究する。

授業実践班では、説明的な文章教材の指導において、理論研究班の研究に基づいた授業改善の視点を設け、その視点に基づいた具体的指導の在り方を研究する。

このような研究が、えびの市全体の児童生徒の読解力を高め、そのことが「生きる力」や「確かな学力」につながると考え、本主題及び副題を設定した。

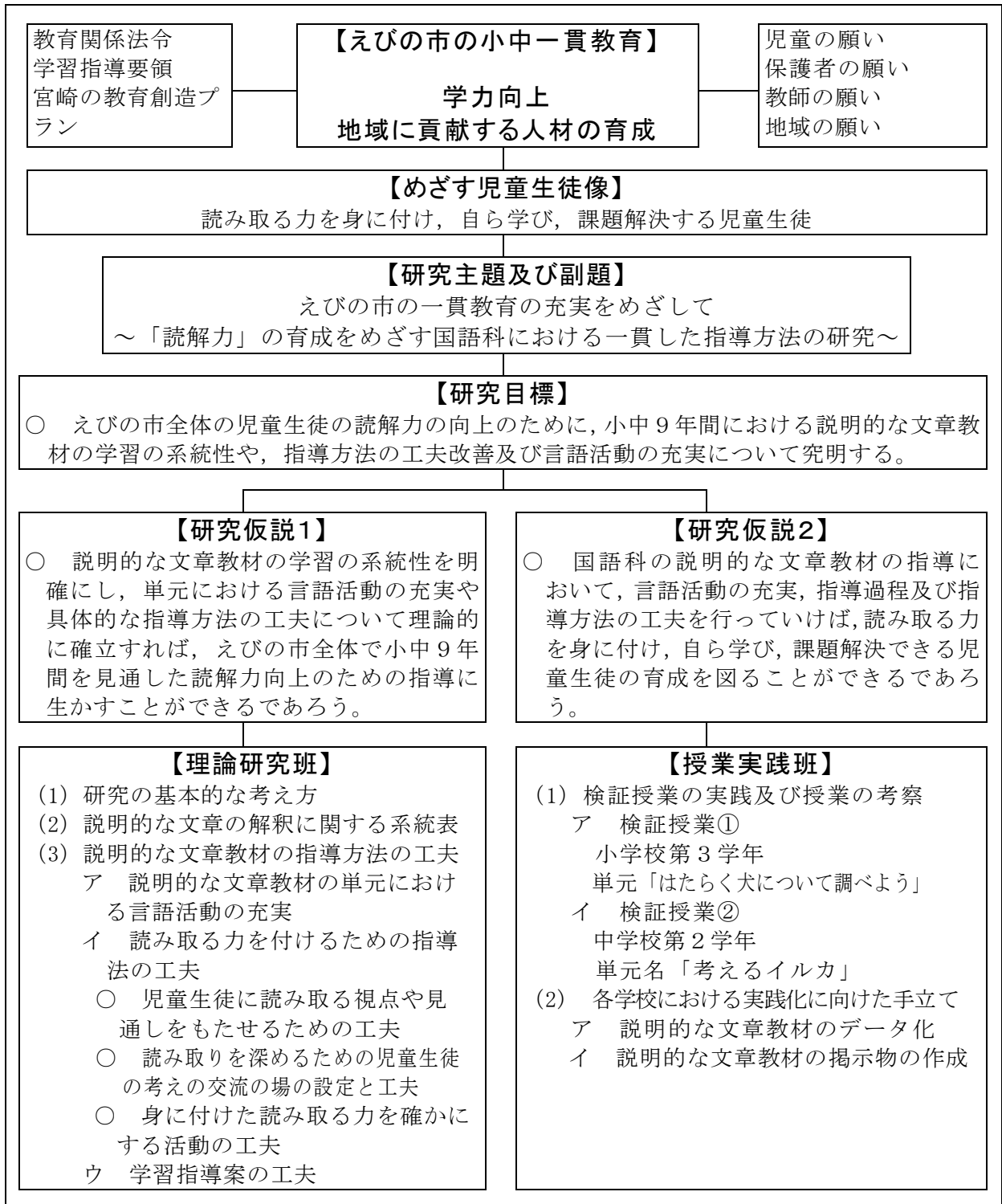
III 研究目標

○ えびの市全体の児童生徒の読解力の向上のために、小中9年間における説明的な文章教材の学習の系統性や、指導方法の工夫改善及び言語活動の充実について究明する。

IV 研究仮説

- 説明的な文章教材の学習の系統性を明確にし、単元における言語活動の充実や具体的な指導方法の工夫について理論的に確立すれば、えびの市全体で小中9年間を見通した読解力向上のための指導に生かすことができるであろう。
- 国語科の説明的な文章教材の指導において、言語活動の充実、指導過程及び指導方法の工夫を行っていけば、読み取る力を身に付け、自ら学び、課題解決できる児童生徒の育成を図ることができるであろう。

V 研究構想



VI 研究の実際

1 理論研究班の研究

(1) 研究の基本的な考え方

本研究では「読み取る力を身に付け、自ら学び、課題解決する児童生徒」を次のようにとらえている。

読み取る力	教材文を肯定的にとらえて理解するだけでなく、教材文の内容や筆者の意図などを解釈すること、内容、形式や表現、信頼性や客観性、論理的な思考の確かさなど理解・評価すること
自ら学び	何のためにその教材文を読むのか、読むことによってどういうことをめざすのかといった目的をもつこと
課題解決する	教材文の内容を要約・紹介すること、再構成すること、自分の知識や経験と関連付け意味付けること、自分の意見を書いたり論じたりすること

すなわち、単に読んで理解するだけでなく、読むことに目的をもち、考える力と連動した形で読む力を高める取組を進めていくことである。そのためには、思考力・判断力・表現力を連動して読むことが大切であり、新学習指導要領で重視されているように言語活動を充実させる必要がある。そこで本年度は、説明的文章教材において言語活動を充実させることが読み取る力を身に付けさせ、自ら学び解決できる児童生徒の育成につながると考え、研究を進めることにした。

(2) 説明的な文章の解釈に関する指導事項等の系統表

小中一貫教育では、小学校と中学校が連携し、9年間で児童生徒を育成するという視点が大切である。そこで、中学校3年段階というゴールを意識して、説明的な文章の解釈に関する指導事項等についての系統表を作成した。系統表の「重点指導事項」には、新学習指導要領解説「国語編」から各学年の重点指導事項をまとめ、小中の指導の系統性が分かるように工夫した。

【「説明的な文章の解釈に関する指導事項等の系統表」(一部抜粋)】

	読むこと	読むこと	読むこと	「話すこと・聞くこと」「書くこと」「言語事項」との関連
小学校低学年	書かれた場面や付いた態度を	読むこと	【時間的な順序や事柄の順序】 ○ 順序を読み取る視点 ・ 時間的順序 ・ 事柄の順序(文章に取り上げられた話題自体に内在するもの) ・ 文章表現上の順序(どのように文章を構成しているか)	相手に応じて話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気をつけて話すこと。【話・聞】イ ・ 自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。【書】イ
小学校中学年	目的を達成するために	読むこと	【中心となる語や文に注目した内容の整理】 ○ 内容を整理の視点 ・ 中心となる語や文→①要点をまとめる。 ②小見出しを付ける。 ・ 要点とは、段落の中でもっとも大事なところのこと。 ・ 要約とは、段落の要点を、段落相互の関係を考えつないだもの。あらずじ。 【事象と意見との関係を考えること】 ○ 事象と意見との区別 【段落相互の関係を考えること】 ○ 目的に応じた段落相互の関係	文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること。【書】イ ・ 指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使うこと。 【言】イ(ク)

また、次年度からの小学校国語科の教科書(東京書籍)には、国語科の学習で付けたい力を「言葉の力」として明確に示している。これは、国語科で学習したことが、他の教科や生活に活用できるようにするためである。この「言葉の力」を通して示してある指導事項等は、本研究がめざしている「読み取る力」の基礎となるため、一覧表にまとめた。これにより、例えば3年の要点・要約の学習は、4年の段落相互の関係をつかむ学習に結び付き、5年の要旨をとらえる学習へと発展するなど系統性が明らかになった。なお、この一覧表と説明的な文章の解釈に関する系統表は、各学校の研修において活用できるようにした。

【「言葉の力」一覧表(一部)】

1年	【説明的文章を読む】 ○ くりかえし出てくる言葉に気をつけて読む。 ○ 何がどんな順序で書かれているか考えながら読む。
3年	【段落の内容をとらえる】 ○ 文章は、いくつかの段落が集まってできている。一つ一つの段落に何が書かれているかをとらえることで、文章全体の内容をとらえやすくなる。段落の内容をとらえるときは、繰り返し出てくる言葉や段落とつながりはあると思う言葉など、大事だと思う言葉に気をつけて読む。 【要約する】 ○ 書かれている内容を短くまとめることを要約という。 要約には、何について書かれているか考えながら読み、それぞれの段落

(3) 説明的な文章教材の単元における言語活動の充実

児童生徒が目的や課題をもち、課題を解決していくためには、言語活動と教材の読み取りが児童生徒にとって一連の活動となった問題解決的な学習展開を行う必要がある。

そこで、単元の展開として、教材文を用いて計画的に指導事項を身に付けさせるとともに、単元末には教材文の読み取りで身に付けた読み取る力を他の資料等を用いて生かせるような展開を工夫した。

この単元の展開により、言語活動と教材の読み取りが、児童生徒にとって一連の活動となるようにした。また、教材文の読み取りと単元末の言語活動において指導を繰り返し、読み取る力を身に付けさせることができるようにした。

【説明的な文章教材の単元における言語活動の充実】

	主な学習活動及び学習内容	指導方法の工夫及び言語活動の充実
つかむ	1 本単元の学習について話し合う。 ○ 単元のテーマについて、これまでの経験を話し合う。 ○ 全文を読んで、あらましやあらすじをとらえる。	○ 本単元の学習について見たり聞いたりして知っていることを話し合い興味関心を高める。 ○ 学習のゴールの姿を知り、単元で行う言語活動について児童生徒がイメージをもてるようにする。
見通す	2 学習課題と学習計画を立てる。 ○ 学習課題を設定する。 ○ 学習方法や調べる方法等の計画を立てる。	○ 教材文を読む必要感をもてるようにする。 ○ 学習の見通しをもてるようにする。
調べる	3 学習課題解決のために、教材文を読み取る。 ○ 主述関係、中心文、要点をとらえる。 ○ 段落をまとめる。 ○ 段落相互の関係をとらえる。 ○ 読み取ったことをまとめる。	○ 前単元までに身に付けた力を生かして読む。 ○ 叙述に即して思考し、学習課題について自分の考えをもつ。 ○ 友だちの考えと交流しながら読みを深める。 ○ 教材文の読み取りを生かした、単元末の言語活動にもつなげる学習活動（話すこと・聞くことや書くことなどの言語活動）を行い、読み取る力を確かにする。
深める・まとめる	4 教材文の読み取りで身に付けた力を言語活動に生かす。 5 学習を振り返る。	○ 単元のテーマに沿って、話すこと・聞くことや書くことなどの言語活動を行う。 ○ 一人一人のまとめたことを発表し合う。 ○ 表現についての感想を交流し合い、自分や友だちの学習活動のよさについて、評価する。

(4) 読み取る力を付けるための指導法の工夫

ア 児童生徒に読み取る視点や見通しをもたせるための工夫

読み取る力を身に付けるためには、読み手が課題や目的に応じて、考えをまとめたり深めたりできるように読み取る視点や見通しをもたせる必要がある。

そこで、一人調べ（自力解決）の段階で、下の表のような、目的や意図に応じて読み取らせるための視点や見通しをもたせる手立てを行うこととした。

読み取る視点や見通し	手立ての例
読み取りの進め方	○ 前単元、前時までに身に付けた力を使って調べさせる。 ○ 学習の具体的な進め方について知らせる。
読み取りの視点	○ 何を読み取るのか明確に示す。 ○ 読み取る際の手がかりを与える。
読み取ったことのまとめ方	○ サイドラインを引かせること、書かせること、発問でとらえさせること等、何についてどのようにまとめるのかを明確にする。

イ 読み取りを深めるための児童生徒の考えの交流の場の設定と工夫

読み取りを深めるためには、自分なりの考えをもたせた上で考えを交流する場を設定する必要がある。そこで、一人一人の児童生徒の考えを出し合い、考えを交流することができるように、目的に応じて少人数や全体での話し合いを設定することとした。話し合いにおいては、読み取りを深めるための発問や指示を行うこととする。また、まとめたことを読み合うだけでなく自分の考えが深められるように、基本的な話し合いの仕方に沿って進めるようにした。話し合いの際、特に留意して指導していくのは以下の3点である。

- それぞれの考えの共通点や相違点、よさをはっきりさせながら聞き取る。
- 友だちの意見に対する意見を述べたり、叙述に即した根拠を挙げながら述べたりする。
- 話し合いで深まった考えを述べる。

ウ 身に付けた読み取る力を確かにする活動の工夫

身に付けた読み取る力を確かにするためには、本時の学習で学んだ読み取った力を自分の言語活動や生活に取り入れることができるようにする必要がある。

そこで、単元の「調べる」「深める」段階の各1単位時間の終末段階に、本時の教材文の読み取りを生かして、自分でまとめたり自分の考えを書いたりするなどの言語活動を取り入れ、本時の目標とした読み取る力（指導事項）を確かにしていくようにした。この身に付けた読み取る力を確かにする活動は単元末の言語活動にもつながる学習活動である。

(5) 学習指導案の工夫

読み取る力を身に付けさせるためには、まず単元における指導事項を明確にすること、そして指導事項を身に付けさせるのに適切な言語活動を設定し指導を行うことが重要であると考え。そこで、指導案に単元における指導事項と指導事項を身に付けさせるのに適切な言語活動について記すようにした。指導案作成時に留意するのは次の点である。

- 学習指導要領の指導事項と単元の目標を対応させ、単元での指導事項を明確にする。
- 単元の目標に対応する指導事項を、どの段階で指導するのかを記す。
- 本単元での指導事項を身に付けさせるのに適切な言語活動を設定する。
- 指導事項の系統を考慮する。

2 授業実践班の研究

読み取る力を身に付け、自ら学び、課題解決できる児童生徒の育成のために、理論研究班の研究に基づいて、指導事項の明確化、単元の展開や指導方法の工夫、適切な言語活動の充実について、授業改善の視点を設定し小学校第3学年と中学校第2学年において、検証授業を行った。

(1) 検証授業①（小学校第3学年）

ア 学習計画

【単元名】「はたらく犬について調べよう」〔教材：もうどう犬の訓練〕		
【読むこと】の目標		
○ 中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考えるとともに、事実と具体例に注意し、書かれている内容を短くまとめながら読み取ることができる。		
【指導計画】（14時間）		
	主な学習活動（時間）	言語活動の充実及び教師の支援
つかむ	1 学習のゴールの姿を知る。（1時間）	目的・課題をもたせる 学習のゴールの姿「はたらく犬もの知り事典」のカードを紹介することで、単元の課題がもてるようにする。
見通す	2 学習課題と学習計画を立てる。（1時間） 学習課題 はたらく犬もの知り事典をつくろう。	

調べる	3 大事な言葉や文を見つけて、段落の内容を短くまとめながら読み、盲導犬になるための訓練を読み取る。(6時間) (本時6/14)	教材文で読み取る力を身に付けさせる 教材文で「訓練すること」「詳しい説明(例など)」を見付け、要点をまとめる読み取り方を身に付けさせる。
深める	4 「はたらく犬」について、資料を調べ大事だと思うことをシートに書き出す。(3時間) 5 シートに書いたことを短くまとめて「はたらく犬もの知りカード」を作る。(1時間)	身に付けた読み取る力を生かしてまとめさせる 教材文の読み取りを活用し、適切な文量と情報量の資料から、必要なことを引用したり、まとめたりさせ、読み取る力を付けさせる。
まとめる	6 カードを読み合い、「はたらく犬もの知り事典」をつくり、学習を振り返る。(1時間) 7 単元末の評価テストを行う。(1時間)	
【本時の目標】 ○ 訓練の事実や様子と具体例が書かれた部分に注意しながら、「人を安全に導く訓練」の内容を読み取ることができる。		
【指導過程】 主な学習活動		言語活動の充実及び教師の支援
つかむ	1 本時の学習について話し合う。 学習問題 人を安全にみちびく訓練とはどのような訓練なのだろう。	
見通す	2 学習の進め方について確認する。	視点や見通しをもたせる ○ 「訓練すること」「詳しい説明(例など)」を見付け、要点をまとめることを確認する。 ○ 「訓練すること」「くわしい説明」を分けて教科書にサイドラインを引く活動を通して、要点となる文を読み取ることができるようにする。
調べる	3 「人を安全にみちびく訓練」の内容や具体例を調べる。	
深める	4 調べたことをもとに、「人を安全にみちびく訓練」の内容や具体例について話し合う。	読み取りを深めさせる ○ 読み取りを深めさせるために、叙述に即した根拠をあげながら述べさせたり友だちの意見に対する意見を述べさせたりする。
まとめる	5 「人を安全にみちびく訓練」とはどのような訓練か書きまとめ、確認する。 6 本時の学習を振り返る。	読み取る力を確かにする ○ 学習課題のまとめを、板書を手がかりに自分なりに書かせ、教えること(事実)を落とさずまとめさせ、読み取る力を確かにする。

イ 授業の考察

(ア) 説明的な文章教材の単元における言語活動の充実

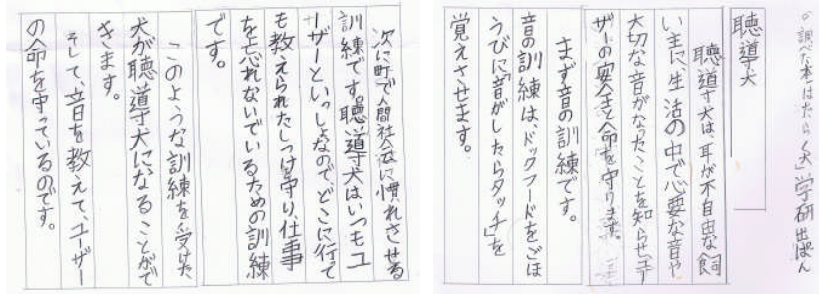
本単元の導入段階においては、「はたらく犬もの知り事典」のカードを示し、事典作成のために教材文で読み取り方を身に付けること、身に付けた読み取り方を使って本を読みカードに要約する活動を行うという単元の展開を、児童に示した。これにより、言語活動と教材の読み取りが児童にとって一連の活動を通して意識されたとともに、児童が目的や課題をもって学習することができた。

また、単元前半で教材文を用いて中心となる語や文をとらえる読み方を学習し、後半では資料を用いて教材文の読み取りで身に付けた読み取る力を生かし要約する活動を行った。「はたらく犬もの知り事典」のカード作成では、児童が要点となる文を見つけてまとめることができおり、目的をもって言語活動を行うとともに言語活動を通して読み取る力を身に付けることができたと考える。

【児童に示した単元計画】

学習課題	はたらく犬もの知りじてんをつくらう。
学習計画	一 「もっとう犬の訓練」を読み取る。 ○ もっとう犬とはどんな犬か。 ○ もっとう犬になるまでに、どんな訓練をするか。 二 「もっとう犬の訓練」の読み取り方を生かして本を読み、 「はたらく犬もの知りじてん」をつくる。 ○ 「はたらく犬」の本を読んで調べる。 ○ 調べたことをはたらく犬もの知りカードにまとめる。 ○ 読み合う。

【単元末に作成した「はたらく犬もの知り事典」のカードの例】



(イ) 読み取る力を付けるための指導法の工夫

a 児童に読み取る視点や見通しをもたせる工夫

児童に訓練の事実や様子と具体例が書かれた部分に注意しながら、内容を読みとらせるために、「訓練すること（要点）」と「詳しい説明（例や具体例）」という読みの視点をもたせ、本文にサイドラインを引かせた。サイドラインが引けない児童には、個別指導の中で具体例を書くときに使われる言葉「たとえば」に着目させた。これにより、訓練の事実や様子と具体例が書かれた部分に注意して読み調べることができた。ただ、本時においては要点が二文あったため、一つしかとらえられない児童が見られた。児童の実態に応じて調べさせ方についてもより細かな手立てが必要である。

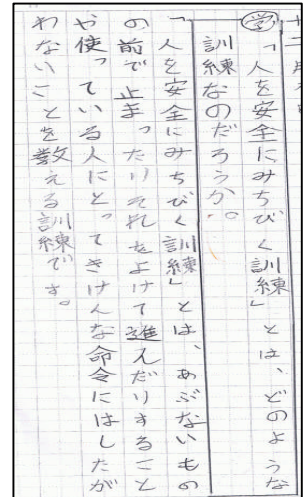
b 読み取りを深めるための児童の考えの交流の場の設定と工夫

全体の話し合いでは、話型を活用して友だちの意見に対する意見を述べることや叙述に即して根拠を挙げながら述べさせた。これにより、「意見があります。」と友だちの発表と自分の考えを比較した発言や、「例えばと書いてあるから」と文章から根拠を示した発言が聞かれた。これらの意見により、一人調べでは気付かなかった考えに触れることができ、読み取りを深めることができた。

c 身に付けた読み取る力を確かにする活動の工夫

本時の目標である読み取る力を確かにするために、学習問題である「人を安全に導く訓練」とはどのような訓練か、要点と詳しい説明を整理した板書を手がかりに、短くまとめる活動を取り入れた。自分でまとめるために、要点となる文がどれか再考しており、読み取る力を確かにする活動となった。まとめることができていない児童に対しては、個別指導を行うとともに「すべての要点をつかってまとめる」ことを全体で確認してまとめ、読み取る力を確かにすることができた。

【児童がまとめた要点の一例】



(2) 検証授業②（中学校第2学年）

ア 学習計画

【単元名】「考えるイルカ」		
【読むことの目標】 ○ 文章の構成や論理的な展開，表現の仕方をとらえ，自分の考えをまとめることができる。		
【指導計画】（5時間）		
	主な学習活動（時間）	言語活動の充実及び教師の支援
つかむ・見通す	1 学習のゴールを知るとともに，論理に関する用語の意味を理解し，三段論法について理解する。（1時間）	目的・課題をもたせる 筆者の構成や論理の展開の仕方を生かして課題作文を書くという学習のゴールを知ることによって学習の目的をもたせる。
	学習課題 筆者の論証が正しいかを考え，筆者の文章を批評しよう。	

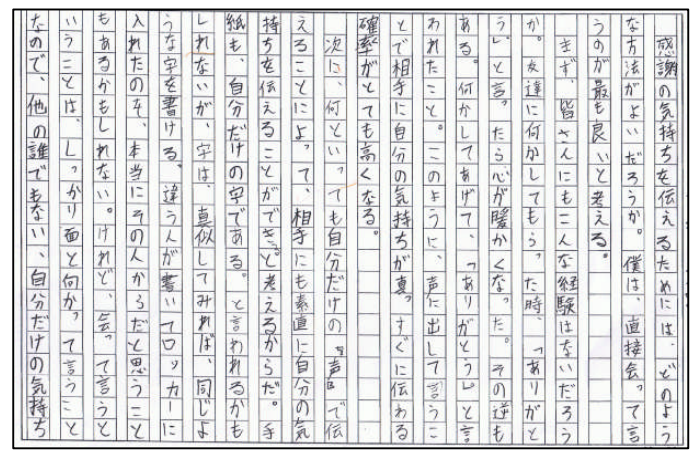
調べる	2 筆者の主張の根拠を確かめ、構成図に表わすことで、その論理の展開を読み取る。(1時間)	教材文で読み取る力を身に付けさせる 文章や図で書き表し、論証の基本構造を理解させる。 論理の飛躍等について理解させ、文章を読み論理の筋道をたどりながら、筆者の論証について吟味させる。
	3 筆者が行った訓練・実験の内容、実験の考察とその理由づけを読み取る。(1時間)	
深める・まとめる	4 筆者の論証の仕方を読み取り、吟味する。(1時間)(本時4/5)	身に付けた読み取る力を生かしてまとめさせる 筆者の構成や論理の展開の仕方を生かすことを条件として、課題作文に取り組みせ、読み取る力を付けさせる。
	5 筆者の構成や論理の展開の仕方を参考に、課題作文を書き、互いに読み合う。(1時間)	
【本時の目標】 (4/5) ○ 筆者の論証が正しいかを吟味し、自分の考えをもつことができる。		
【指導過程】 主な学習活動		言語活動の充実及び教師の支援
つかむ	1 前時の学習を思い出す。 2 本時の目標と進め方を確認する。 学習問題 筆者の論証が正しいかを考え、筆者の文章を批評しよう。	
見通す	3 論証が正しいかを考える視点を理解する。	視点や見通しをもたせる ○ 「根拠が単なる推論ではないか」「論理の飛躍はないか」という論証を吟味する視点を与え、例文を使って全体で論理の飛躍について理解させる。
調べる	4 筆者の論証を吟味する。	
深める	5 グループで吟味する。	読み取りを深めさせる ○ 吟味の視点に基づいて、グループで筆者の論証の吟味を行い、考えを深めさせる。
まとめる	6 筆者の論証の確認と表現の仕方について確認し自分の考えを書く。 7 本時の学習を振り返る。	読み取る力を確かにする ○ 生徒が的確に書くことができるように、書く際の条件を提示し、筆者の論証の仕方についてどう考えるか自分の考えを書かせ、読み取る力を確かにする。

イ 授業の考察

(ア) 説明的な文章教材の単元における言語活動の充実

単元導入時に、教材文「考えるイルカ」の構成や論理の展開の仕方を参考に、根拠を明らかにして課題作文「感謝の気持ちを表すにはどのような方法がよいか」を書くという言語活動を生徒に示したことで、生徒が目的意識をもって教材文を読み取ることができた。まず、教材文の構成や論理の展開の仕方を読み取る学習活動を、次に、筆者の文章を吟味しそれに対して自分の考えをもって批評文を書くという学習活動を、さらに、その構成や展開等を参考に論理的で説得力のある課題作文を書くという学習活動を行った。課題作文では筆者の文章の構成や論理的な展開を生かして書くことができていることから、これらの活動を通して、生徒に文章の構成や論理的な展開、表現の仕方を習得させ、学習したことを活用して文を書く力を身に付けさせることができた。

【単元末の課題作文の例】

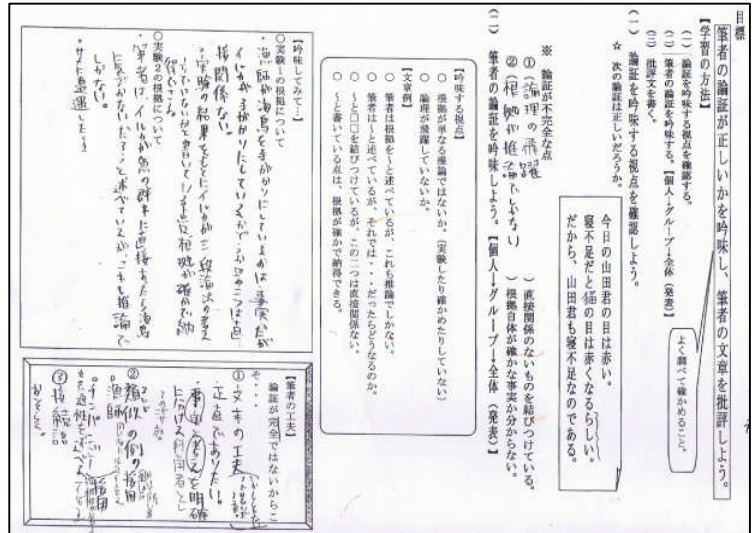


(イ) 読み取る力を付けるための指導法の工夫

a 生徒に読み取る視点や見通しをもたせる工夫

見通す段階で、例文を使って論理の飛躍と根拠の妥当性について全体で確認し、筆者の論理を吟味する「根拠」「論理の飛躍」という視点を与えた。一人調べの際に、吟味したことをワークシートにまとめることができていたことから、ワークシートをもとに論証の吟味を全体で行ったことと、吟味する視点と吟味した後の考えの記述について文章例を挙げたことで、生徒は本時の目的とやり方を理解し、考えをもつことができたと考えた。

【吟味の視点を確認し、自分の考えを書くワークシート】



b 読み取りを深めるための生徒の考えの交流の場の設定と工夫

グループで吟味する段階では、個人の考えを記入したワークシートをもとに、互いに意見を出し合った。一人調べの時に自分の考えを書いており、吟味の視点と考え、理由を挙げて話し合うことができた。また、話合いの中で他の人の発言を言いかえたり、意見を聞いてワークシートに書き加えたりする姿が見られた。話合いを通して根拠の違いや違う視点での吟味に触れることができたと考えた。

【グループでの吟味の様子】



c 身に付けた読み取る力を確実にする活動の工夫

「筆者の論証の仕方について納得できるか」という問いに「筆者の論述の仕方を具体的に挙げて考えを書く」という条件をつけて、批評文を書かせた。これにより論理の飛躍、根拠が推論にすぎないこと、類似の例の援用、文末表現の工夫に着目して、筆者の論理について吟味し、自分の考えを書くことができた。学習した読み取る力を確実にするとともに、課題作文に生かすことができたと考えた。

3 各学校における実践化に向けた手立て

(1) 説明的な文章教材のデータ化

小学校段階では、説明的文章教材でも文学的文章教材でも、教材文の全文、または本時に学習する範囲の全文を黒板等に掲示して指導すると、教科書のどこを学習しているのかが視覚的に分かるため、児童の理解の手助けとなる。

そこで、説明的な文章教材の全文をデジタルデータにしてえびの市の小学校に配付した。これにより、パソコンで拡大して印刷すれば、わずかな手間で掲示物や教材文入りの学習プリントを作成することができるようになる。このような取組が理解しやすい授業へとつながると考える。

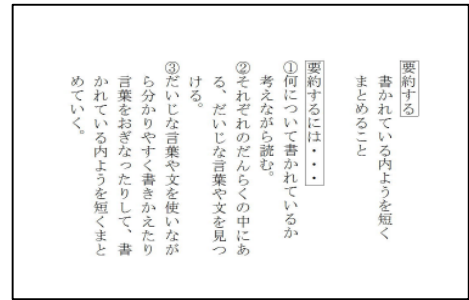
(2) 説明的な文章教材の掲示物の作成

説明的な文章教材を指導する際、「要約する」「要旨をとらえる」などの学習方法や「接続語」や「文末表現」など読み取る際に必要な知識などを掲示することは、それらを意識しながら学習することにつながり、学習の効果は非常に高まる。そのことがえび

の市全体における読み取る力の向上につながると考え、説明的文章教材に関する掲示物のデジタルデータを作成した。

その際、前述した説明的文章教材の「言葉の力」の内容はすべて作成し、各学年で確実に読み取る力が定着できるように配慮した。

【小学校3年 要約の学習】



Ⅶ 成果と課題

1 研究の成果

- 9年間を通して読み取る力を育成するために、小学校1年から中学校3年までの指導事項等の系統を整理したことで、学年段階および単元での身に付けさせる指導事項が明確になり、指導の重点化を図ることができた。
- 単元における指導事項を明確にし、指導事項を身に付けさせるのに適切な言語活動を設定したことで、言語活動が充実し目的を明確にした指導ができた。また、言語活動と教材の読み取りが児童生徒にとって一連の活動となり、目的をもち課題を解決していくことができた。さらに、単元全体を通して指導事項を計画的に繰り返し指導することができ、読み取る力を身に付けさせることにつながった。
- 一単位時間において、児童生徒に読み取る視点や見通しをもたせ、児童の考えを交流させる場の工夫を行ったことで、児童生徒が課題や目的に応じて、考えをまとめたり深めたりすることができた。また、読み取る力を確かにする活動を取り入れたことで、読み取る力を身に付けることができた。

2 今後の課題

- 9年間を通して読み取る力を育成するために、小学校1年から中学校3年までの指導事項の系統を考慮して、単元における指導事項と指導事項を身に付けさせるのに適切な言語活動を充実し、指導を積み重ねていく必要がある。
- 市全体で読み取る力を育成するために、読み取る力を身に付けさせるための小中学校共通した本研究の内容と取組を、えびの市の全小中学校で活用していく必要がある。

○ 引用・参考文献

- | | | |
|-----------------|---------|----------|
| 小学校学習指導要領解説 国語編 | 平成20年8月 | 文部科学省 |
| 中学校学習指導要領解説 国語編 | 平成20年9月 | 文部科学省 |
| 新学習指導要領ガイドブック | | 宮崎県教育委員会 |

○ 研究同人

所長	萩原 和範 (えびの市教育委員会教育長)	研究員	大脇 義博 (えびの市立真幸中学校 教頭)
主任指導主事	井上 雅典 (えびの市教育委員会主幹)	研究員	横山 孝子 (えびの市立飯野中学校 教諭)
指導主事	麦田 哲之 (えびの市教育委員会指導主事)	研究員	松下 良子 (えびの市立加久藤中学校 教諭)
主任	古川久美子 (えびの市立岡元小学校 教頭)	研究員	中島 里佳 (えびの市立真幸小学校 教諭)
班長(理論)	東木場信貴 (えびの市立上江小学校 教諭)	研究員	山本 聡美 (えびの市立飯野小学校 教諭)
班長(実践)	多良真知子 (えびの市立加久藤小学校 教諭)	研究員	武田 和子 (えびの市立上江中学校 教諭)